

【原 著】

小学校教師の社会科観の形成過程に関する研究
—初任期教師に着目して—

福田 友香 桑原 敏典

Study on the Process of Formation of Elementary School Teachers' perspective on Social Studies
-Focusing on rookie teachers-

FUKUTA Yuka, KUWABARA Toshinori

2024

岡山大学教師教育開発センター紀要 第14号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.14, March 2024

小学校教師の社会科観の形成過程に関する研究

— 初任期教師に着目して —

福田 友香※1 桑原 敏典※2

本研究は、初任期の小学校教師が何を拠り所として社会科観を形成しているのか、また自身の社会科観をどのように発展させていこうとしているのかを明らかにしようとするものである。調査の結果、初任期小学校教師は、大学時代の卒業論文を書くために所属したゼミでの学びが核となり、日々の授業での子供観察や教材研究、生徒指導の経験など、新しい経験や価値観に出会うことを通して不足している部分を補いながら自身の社会科観を形成しており、社会科観は流動的であることが明らかになった。また、社会科を通して育てたい子供像については、教師のよりよい未来社会への志向が、社会科の役割に対する考えの核となっており、社会科を生徒指導や生活指導と密接に関連する教科であると認識していた。

キーワード：小学校教師，社会科観，インタビュー，初任期教師，教師のゲートキーピング

※1 岡山大学大学院教育学研究科大学院生

※2 岡山大学学術研究院教育学域

I はじめに

本研究は、初任期の小学校教師が何を拠り所として社会科観を形成しているのか、また自身の社会科観をどのように発展させていこうとしているのかについて、初任期小学校教師に対するインタビュー調査に基づいて実証的に明らかにしようとするものである。

近年の社会科教育研究や教師教育研究の成果から、教科書やカリキュラムに必ずしも縛られない、自立した存在として授業を作り上げていくゲートキーパーとしての教師の役割やその意義が明らかになっている。このことから、教師がもつ社会科教科観や授業観は日々の授業内容や授業の目標に大きな影響を与えていると考えられる。また、教師の教科観に関する研究は、教科担任制である中学校や高等学校の教師を対象として行われるものが多い。しかし、現在の小学校の現場では、教師が1年目から担任をもち、教師が複数の教科指導を担っている。初任期の小学校教師であっても、自立した存在である教師が日々の授業に影響を与えていることから、初任期小学校教師がもつ教科観とその形成背景を明らかにする必要がある。

II 教師の社会科観に関する先行研究の特質と課題

1 社会科教師の教科観に関する研究の特質と課題

教師のもつ社会科観について明らかにした研究として、岡島（2018）と村井（2014）がある。岡島（2018）の中学校社会科教師を対象として教師の社会科教科観を明らかにした研究では、教科観は教師が何に重点をおいて授業を構成するかによって違いが見られることを指摘し、そこでは社会科観の多層性と重層性が示されている。岡島（2018）において、中学校社会科教師が社会科授業の目的について語る際に、「将来どのような市民になって欲しいか」というところから、「中学生としてどのような力をつけるべきか」を導き出し、そのためには「どのような社会科授業が求められているか」という視点で語る多層的な社会科観をもつ教師と、「どのような中学生になって欲しいか」という点から語り始め、社会科だけでなく特別活動など「学校の他の教育活動でも育成すべき資質・能力」として考えて語る重層的な社会科観をもつ教師とが存在することが明らかにされている。

村井（2014）の高等学校地理歴史科教師を対象とした教師の歴史教育観とその形成要因を明らかにした研究では、教師の歴史教育観の形成要因として、教師が出会った生徒、歴史的な社会事象、教師が修得した学問が影響していることが示されている。

岡島や村井らの研究では、中学校または高等学校において社会科、地理歴史科という教科を専門として授業を行う教師を対象としており、調査対象者である教師は、中学校や高校在学時から社会科で扱う内容に興味・関心をもっている。また、大学在学時においても、社会科に関連する学問を学んでいるという共通点がある。加えて、調査対象者は中堅期～ベテランの教師であるため、これまでの経験を踏まえて形成された社会科観の様相や形成要因を明らかにしている。しかし、様々な経験を経て作り上げられた社会科観だけでなく、社会科観を形成していく過程であると考えられる初任期教師のもつ社会科観についても明らかにすることで、教師がどのように社会科観を形成していくのかを明らかにすることができる。

2 小学校教師の社会科観に関する研究の特質と課題

小学校教師がもつ社会科観について明らかにした研究は、渡部・川崎（2013）と張（2022）がある。渡部・川崎（2013）では、小学校教師の年齢・教職歴が社会科授業の実態や意識に与える影響について明らかにし、教職歴や年齢の要因よりも、研究教科を社会科としている、在学時に社会科を専門としていた教師が、教師の教授・学習活動に対する意識や取り組みに急速な変化をもたらすことを示した。

また、張（2022）では、小学校社会科教師の教材開発に着目して教師の教材観の変容を明らかにし、教師は社会と子供の2つの志向の軸を往還しながら自らの立ち位置を調整して教材開発を行っていることを示した。

渡部・川崎（2013）や張（2022）の研究は、小学校教師を対象としたものである。学級担任制であり、担任教師が複数の教科を指導する小学校においても、教師が行う社会科授業や社会科に対する意識を成長させるうえで、社会科を研

究教科としたり，自主的に社会科について自己研鑽を行ったりすることが大きく影響すると推察される。しかし，小学校においてもスティーブン・J・ソーントンの示す，教師はゲートキーピングの役割を持っているという考え方を反映すると，小学校教師のもつ社会科観の様相を明らかにするためには，社会科を研究教科としたり，大学時に社会科について深く学んだりした経験のない教師がもつ社会科観についても明らかにする必要がある。

Ⅲ 小学校教師の社会科観に関する調査

1 調査対象

本研究の対象者は教職歴1～3年目の初任期小学校教師であり，社会科を教えた経験のある教師とした。インタビュー対象者3名の教師のプロフィールは表1のとおりである。この3名の初任期小学校教師は，公立学校に勤務している教師であり大学時代は教育学部に所属している。各教師は大学時代，大学院時代に教育学部においてゼミでは，A教師は社会科教育学を学び，B教師は自然地理学を学び，C教師は教育心理学を学んだ教師である。

表1 インタビュー対象者のプロフィール（調査当時）

	性別	教職歴	社会科を教えた経験のある学年	最終学歴
A	女	2年（講師1年，教諭1年）	第3学年	修士
B	男	2年	第4学年，第5学年	学士
C	男	2年	第3学年，第4学年	学士

2 調査方法

現職の小学校教師を対象に聞き取り調査を実施した。聞き取り調査では半構造化インタビューを行い，教師の自由な語りを求めた。インタビュー時間は1人あたり50分～60分である。インタビュー項目は表2のとおりであり，教師の語りの流れに沿うように随時質問の順番を変えて行った。調査は，所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得て行っている。

表2 インタビュー項目

① プロフィール
② 普段の社会科授業について
③ 社会科の目標や役割について
④ 社会科を通してどのような子供を育てたいか

3 データ分析の方法

本研究は，解釈的客観主義アプローチの立場をとる。桜井（2002）において，解釈的客観主義アプローチとは，帰納論的な推論を基本にしながら，語りを解釈し，ライフストーリー・インタビューを重ねることによって社会的事実を明らかにしようとするものと定義されている。本研究の分析方法は，S・B・メリアム（2004）を参照し，データのたえざる比較法によって暫定的な理論構築という方法でデータ分析を行った。

本研究における社会科観は、村井、岡島にならい、「教育方法、教育内容、教育方法、科目編成を含めて、その教科をどのように捉えているかの総称」とする。

Ⅳ 初任期小学校教師の社会科観に関する調査

1 初任期小学校教師の社会科観

(1) 民主主義社会の形成者育成を目指す教師—A 教師の場合—

A 教師は、教職歴 3 年目の教師で 1 年目は非常勤講師として勤務、2 年目は第 3 学年を担当している。大学・大学院ともに教育学部に所属し、社会科教育学を専門として学んでいる。

以下、資料 1 が A 教師のインタビューデータの抜粋である。質は質問者の問いである。(以下、資料 3 まで同じ)。

資料 1 A 教師のインタビューデータ

質：普段どんな感じの授業をされてるっていうことを教えてもらえたりとかできますか。

A：小学校 3 年生で基本的には地域学習。①できれば理想としては、地域のことをしっかり教材研究した上で子供達に、ちゃんと地域の方と交流を持つ場を設けてやっていきたいところなんですけど、自分の経験値だったり、自分が生まれ育った市と隣の市に勤めているので、自分自身、教材研究が浅くて、なかなか教科書通りに近いような授業を 1 年間してきたかなと思います。

(中略)

質：経験とか地域との交流は学年によらずやっていきたいなと思われている感じですか。

A：そうですね、特に小学校 3, 4, 5, 6 関係なくできる時数と機会があるならやっていけたらなと思います。先生方とも話してて 1 個思うのは、子供たち経験が少なくて、子供だから少ないのは当たり前なんですけど。家でゲームする時間とかが長かったり、外遊びで田舎の子供たちみたいなのもだんだん減ってきてるのかなって。②地域の人と関わる機会も多分減ってきて子供会もあるとこないところあったりするんで、なんかそういうところで授業をしてても経験の差がでる。やっぱその経験の場を保証するっていう意味での、学校にせっかく来ているので、まあ学年は関係なくそういう機会を作ってあげれるっていうのも私たちの立場でできることなのかなと思うので。

(中略)

質：小学校の社会科の中で、どんな授業が理想と思ってますか。

A：小学校で授業をやってみて。今年 1 年間で思ってたのと違うなあって時とかもあって、まだ悩んでるんですけど。

質：思ってたのと違うな—っていうのはなんか。

A：中高を見てたのが多いのもあるかもしれないんですけど、(大学の)先生とかそうなのかもしれないけど、③基本なぜっていう問いがあってそれについて調べていく。最終的に自分なりの答えが出る社会科が基本として学んできてはいるんですけど。④小学生でそれやるの難しいなって思ってるところがちょっとあって。

(中略)

質：1 つのなぜを問うために それにつながるちっちゃい問いというか、どのように、にな

るのかもしれないですけど。どのようにがいっぱい、なぜに繋がっていくみたいな、そういうイメージですか。

- A : そうですね。そういう形になっちゃうのかなって考えてます。⑤でもそれって、結局それはね、教師主導ではある。子供からなぜが出てくるわけではない。まあそこはほんとは仕組みなきやいけないとこなのかもしれないけど。なんか知識を知らない、全く分からない状態で、なぜの課題を考えるのかなあみたいなの。こっちがどれだけ動機づけをしたところで、火事を早く消すためにいろいろやってるって事を知らない状態で、なんでそんなことするのっていう風にはならないんじゃないかなって。なんか今年やってみて分からなくなって。だから理想な社会科って言われると、ざっくり言うと研究中なんですけど。でも、授業の中で経験して行って、経験値も高めて行ってほしいし、でもやっぱり中高のこととかを考えたら、まあそりゃ後の学年、高学年、中学生、高校生で実際社会に出る時ってことを考えたら、まあ身近な話題と今習ったことを結びつけたり、自分が今習ったことをただ知識として知るだけじゃなくて、先生から出された時でもいいかもしれない、先生の発問で考えたとしても良いと思うんで。

(中略)

- A : なんか小学校の時に先生主導でもいいから、そうやってこう何でそうなってるのかとかを考える機会を持っておかないと、なんか中学校高校でそれを自分で使って考えなさいみたいな授業が行われても。見つけられたとしても、そこから先をこういろいろ関連付けて、地域の人と警察官とか。ここがこう思って動いていたから、こっちはそうやってるんじゃないかとかっていうのを頭の中でこう自分で整理しながら考えていくっていうのが難しくなってくるのかなって思ってる。

(中略)

質 : なんか総合と社会科ってなんかこう、どういうふうになんか違いではないですけど、その二つの教科にそれぞれどういう特徴があってどんな役割があってみたいなの。

- A : そうですね。⑥簡単に言ったら私が今違うなって思うのは、社会科はやっぱり、もちろんそのやってる人の思いとか願いとか勉強するけど、結局事実、社会的な事象のその事実がすごい大事なのかなって、そこが知識・技能とつながってくるし、知識としてそこを押さえておくっていうのがまず大前提なのかなと思ってます。⑦だから、地域差はそんなに、調べる地域が違うだけで、人口が変化していることとか、人口が変化したらどうなるんだっていうところとかは、それって多分ある程度一般的な理論で説明出来ることに社会科のことは結構消化できる事が多いのかなって思うけど。だから教科書とかで教える通り教えてもいい。地域がね、島とかの所とかもやりたくても全部はできないと思うから、それで覚えてもいいかなと思うんですけど。

(中略)

質 : 小学校の社会科っていう教科の中でどんな子供を育てたいなあっていうふうに考えていらっしゃるんですか。

- A : ⑧社会に限らずかもしれないんですけど、自分で疑問をもったことを、自分で追究していける、あ、友達の力とかは借りていいんですけど。友達の力を借りるっていう力も含めて、自分で気になったこと、これって本当にそうなのかなっていう疑問をもって、それを調べて、自分なりの答えを出せる子に。⑨私が担任する1年間とかでじゃなく

て、まあ将来的にそうなってくれたら嬉しいなあと思いながら、授業をやってるなあ
と。

質：結構自分なりの答えを出せるっていうのだったり、自分の言葉でっていうことだっ
たり、自分で考えられるっていうのが結構今までのお話の中で上がってたかなと思うん
ですけど、大事にしようと思うようになったきっかけとかって。

A：なんかいろんな世界を見ないと分かんないことなんだと思うんですけど、自分が育っ
てる環境がずっと当たり前だと思ったら。⑩なんか例えばヤングケアラーの子とかっ
て不利益を被ったり、まあ嫌じゃないかもしれないけど、自分の権利をうまく使えて
なかったりするじゃないですか。それをまずそういう権利があるんだっていうのを知
っとくことも大前提として大事なんですけど、なんかそれが違うんだってなった時に、
それが違うと思う理由とかをちゃんと伝えないと、それか理由を伝えないにしろ持つ
てないと多分動けないから。直したいなってなった時とかも、それが当たり前じゃな
いけど。どれが一番いいんかなっていうのを自分の中で考えたり、まあ相手がどう思
ってるのかを考えながらできた方が。

(中略)

質：やっぱり小学校の時から基礎を作るみたいなそんなイメージですか。

A：そうですね、基礎をつくるっていうのもあるし、⑪やっぱもう学校に行ってる時点で
人間関係発生してるし、ちっちゃい社会が発生してるから。その中で自分たちでより
よくしていくような、まあある程度喧嘩しないようにはとか、誰かが損しないように
とか配慮できるためには、自分でそれなりに子供ながらの考えでいいから。あとこっ
ちがいいんだっていうその理由は、なんとなくこの人がしてるからこうするじゃなくて、
まあその人を見るからに優秀できっとこの人がやってるなら間違いないだろうっ
ていうのも 1 個いいと思うんですけど真似をするっていうのも。でも考えれるんだっ
たら自分はたぶんこの人はこっちをしたほうがいいよとか、こっちの方がみんなで仲
良く遊べるとかそういうのを考える力でもあるのかなと思うので。なんか社会だけじ
ゃなくていろんな場面で自分なりに考えをもって進んでいってほしいなって思うし、
それが大人になるにつれて社会の問題とかを考えるとそれが基礎になって、自分
と友達の関係程度のことじゃないですか、範囲として。じゃあそれが中高となった時
に、学校全体、人のことを、日本のこととかって考える子はそうやってこの基礎になっ
ていくのかな。

下線①「地域の方と交流を持つ場を設けてやっていきたい」、下線③「基本な
ぜっていう問いがあって、それについて調べていく。最終的に自分なりの答え
が出る社会科が基本」のように、A 教師は理想とする社会科授業は地域との交
流や体験を伴ったものである必要があると考えており、大学や大学院時代に学
んだ社会科授業理論を実践しようとしている。しかし、下線⑥「結局事実、社
会的な事象のその事実がすごい大事なのかなって、」、下線⑦「一般的な理論で
説明出来ることに社会科のことは結構消化できる事が多いのかな」という言葉
のように、特に第 3 学年の地域を学ぶ単元においても社会科授業では、一般
的な理論で説明できる知識を学ぶことが社会科の目標であると考えていることが
分かる。そして下線②「授業をしてても経験の差がでる。」、下線④「小学生で

それやるの難しいなって思ってるところがあって。」、下線⑤「教師主導ではある。子供からなぜが出てくるわけではない。」という言葉から、理想の授業を行う上での子供たちの生活経験の不足や教師主導の授業になってしまうことへの懸念が社会科授業実践の難しさの要因になっていることが分かる。

下線⑧「これって本当にそうなのかなっていう疑問をもって、それを調べて、自分なりの答えを出せる」子供を社会科を通して育てたいと考えているが、下線⑨「私が担任する1年間とかでじゃなくて、将来的にそうなってくれたら」、下線⑩「自分の権利をうまく使えてなかったりする」の言葉から、A教師は社会科で育てたい子供像について、子供たちが社会科授業を通して育ち、市民として社会に参加していく際のことと考えて社会科の目標を考えていることが推察される。そして、下線⑪「学校に行ってる時点で人間関係発生してるし、ちっちゃい社会が発生してるから、その中で自分たちでよりよくしていくような」というように、A教師は小学校を民主主義社会の縮図と考えており、その社会をよりよくしていくために自分で考え行動していく市民としての経験を子供たちに積んでいってほしいと考えていることを示している。A教師の社会科観は、学部や大学院時代に学んだ、授業や問いを構成する理論を応用しようとしながらも、目の前の子供たちに合わせて授業や問いを再構成しようとする授業観と、学校やクラスを社会の一部と捉えて、その中で、自分で考え行動していける市民を長期的な視野で育成しようとする育てたい子供観によって構成されていると言える。

（２）社会科学的な見方考え方の育成を目指す教師―B教師の場合―

B教師は教職歴2年目の教師で1年目は第4学年、2年目は第5学年を担当している。大学時代は教育学部に所属し、卒業論文を書くために所属したゼミでは自然地理学を学んでいる。

資料2 B教師のインタビューデータ

質：去年1年間こんな授業したなあと一番印象に残ってる社会科の授業を教えてください。

B：それはあれだな。川、堤防、災害の学習をした災害について触れた時に、地形を読み取るっていう活動を入れたことがあって。水の流れとかこの川、堤防っていうのがどんな役割をしてるかとか、堤防がなんであるのかっていうことを学習のメインにおいて、それを発見させるっていうところを学習しました。その中でその堤防っていうのが実際どうなってるのかを見るために地理院地図ってのがあるんだけど、それを使って土地の高低差、その地図を使ってどこが高くどこが低いのかとかを子供たちで見つけながら堤防の役割っていうのを考える授業を1回したかな。それが一番心に残っています。

（中略）

質：なんかその授業の中でここは工夫したとか、あればお願いします。

B：それこそ濃淡の地図を使ったっていうところは工夫したところかなと思っていて。

（中略）

B : あの横に切った輪切り, なんていうのかな。あのなんかあるじゃないですか, 地面をこう切る地図。①地図っていうかそういう図も出せるけど, それをするとなんか地図を見させてる感じっていうか, 地図を見て学習するとかっていうその地理的な感覚を養うためにはそういう図じゃなくて, あえて使ったっていうところもあります。

(中略)

質 : B 先生が思ってる地理的感觉っていうのは具体的にはどういうものですか。

B : 僕はその地図とかその土地を見たときに, この土地が昔どんな使われ方してたのかなとか, なんで今こういう風に川があるのかなとか, ここの川にこの石が落ちてるのなんだかなとか, 今あるものを漠然とそうなんだなって思うんじゃないくて, その横に広がってる地形っていう, 今出てきてる地形っていうのの歴史を知るみたいな。地理っていうと横の広がりの方が感覚がみんなあると思うんだけど。地図とか地理とかって横, 横に見るっていうかこのアメリカがあって日本があってその間に太平洋があってみたいな, そういう横に見る感覚が強いと思うんですけど。②でも地理ってそうじゃなくて, その土地が今まで積んできた歴史が積み重なってその土地ができてから, その横の広がりだけでなく地理は縦のつながりもあるんだよっていうところに目を向けられるようになったら, その地理的感觉っていうのかわかんないんだけど, 地理に興味を持てるかなと思うし, そこで歴史と地理が絡んでくるからこそ社会科なんだろうなって思う。

質 : その大学の時のまあ勉強っていうかまあゼミのことでもいいし。そういうのが結構影響してると思う？

B : もろに影響してると思う。それこそさっきの, (大学の先生) になんで世界史ってやると思うっていう話をされたんだよね, いつか忘れたけど。でさっぱり分かん, はあ？とか思ってたけど。なんかその世界史の近現代史すごく大事だよって話をしてて。なんでかって言ったら, ③その近現代史があることで, そこからそれを学んで同じ失敗を繰り返さないみたいな話が確かあった気がするんだけど, その話を聞いて歴史って大事なんだなーって思ってた, その時はそれを聞いた時は地理と歴史は全然ひっつかないと思ったんだけど, (大学の先生) が地理は横だけでなく縦にも広がってるんだよって話を聞いた時に, あなるほどね歴史と地理って別個じゃなくてつながりあってるものなんだなーっていうのが, その繋がり分かった時にあーなんか面白いなって思った記憶がある。

(中略)

質 : もともと地理面白いなあって思ってたってことだったんですけど, そう思ったきっかけとかはありますか。

B : それは高校の地理の先生がすごく面白くて, あとはセンターって地理すごく僕得意だったんだけど, あの地理の問題って, 歴史とかって覚えたらそれを覚えてそれを使うみたいな並べ替えするみたいなのが多いんだけど, 地理だったらその覚えていることを使いながら, この要素とその要素とこの要素があるからこの問題のこの答えは絶対違うよねみたいな風にして。今持ってる情報を組み合わせていって繋げていくことによって問題を解くみたいな問題が多かったのよ。自分の持ってる情報を繋げていく感覚っていうのがすごく楽しかったのかな, 今思えばね。っていうのがあるからそれを

やってみて地理が好き、まあそもそも授業が面白かったし、そういうふうな解き方ができるから地理の問題って面白いなと思ってその時から地理は好きだった。④だけど今は全然考え方が違うんだけど、問題を解くっていうことに関してはそういう面白さがあって地理に入ったけど、今はその縦と横のつながりっていうのがすごい面白いなって思って地理をやってるっていうところはあるかな。

(中略)

質：小学校の先生ってやっぱり、ほぼ全教科を教えるっていう感じで、そういういろんな教科がある中でも小学校社会科が持つ役割とかってどういう風なものがあるって思ってますか。

B：まあ社会科全般で言うとしたら、社会の仕組みを知ると、見方とか考え方なのかな結局は。見方とか考え方を育てるっていうところが一番大きいんじゃないかなと思って。まあどの教科でもそう言ったらそうかもしれないけど、社会科は特に具体的な事例が出されていて、例えばその普段何気なく見ていた横断歩道でも、こんな工夫があるんだなとかを知る。その日常生活の中で考える力、考える視点を持てるようになるのってやっぱり社会科の魅力じゃないかなと思ってるところがあるかな。

(中略)

質：社会科でいう見方・考え方ってどういうイメージですか。

B：それ結局さっきの地理の話に戻っちゃうんだけど、⑤今見えてるものから新しいものを見つけ出したりとか、今見えてるものを違う視点から見たら見え方が180°変わりましたみたいな。そういう一つの物事いろんな視点から見ることによって得られるこのことそれが見方だし、いろんな視点から見たものをじゃあこれどういう風に使っていくのかとかそれをたくさんある見方の中から、じゃあどういう風にしたらいいのっていうのが考え方になるんじゃないかなと思ってるかな。

(中略)

質：中学校や高校の社会科を考えたときに、小学校社会科っていうものの役割とか特徴とか、なんかこう思ってることとかあればお願いします。

B：小中高の違いね。⑥小学校は、どっちかっていったら知識量的にはすごく少ないから、その知識と知識の間を埋めるために、どうしても見方考え方を使う必要があるから、そこつながるんだよね。そこで繋げる意識っていうのがすごく強いかなと思う、その情報と情報とを。中学はその情報をつなげるっていう作業が情報量が増えてくるわけだからより細かく繋がっていくからそのつなぎ方も色々あるし、つながりも増えていくから、それこそ見方が増えてくると思うんだよね中学では。

(中略)

質：小学校の社会科っていう教科を通してどんな子供を育てたいと思ってますか。

B：⑦1つの物事をちゃんといろんなところから見れる人になってほしいなあっていうことかな。例えば、今誰かが誰かを殴りましたみたいな、で喧嘩がおきましたっていうと、殴った方が悪くて、殴られた方が可哀想っていう、それが一つの見方なんだけど。見方を変えるとなるとその子はそういうこと、殴ってしまったのかとか、その殴ってしまった背景にはその殴られた方がなんか嫌なこと言ったとか。⑧嫌なことを言った子も実は前に何かされたりとかっていうふうにして、完全にその行動だけじゃなくて、

裏というかその背景を読んでいくようなことが出来ると人間関係とか普段の生活も良くなっていくし。後は、いろんな視点から一つの物事を見れると、今すごい個性を大事にするってあるじゃない。例えば、障がいとか特性がある子たちがいると、その子たちが、行動だけを見ると教室飛び出たりとか、机ガンガン蹴ったりとかするんだけど、それは確かに周りからしたら嫌だなと思う子がいると思うんだけど。⑨そういう特性を受け入れていったりとかその人の個性を認めていったりするためには、1点からしか見ていなかったら、これがダメっていうふうに言ったらそれはもう見えないじゃない。そういう見方とかその人を見る力、人だけじゃなくてもいろんな物事を見る力は、1点だけじゃなくてほかの方向から見てその相手を認めていくことが必要だと思うから。その力を育てるには社会科はうってつけだよっていうふう思う。

下線①「地理的な感覚を養うためには」、下線②「横の広がりだけでなく地理は縦のつながりもある」のようにB教師は第4学年の社会科について、地理と歴史という2つを軸にして、特に「地理的感覚」の育成を目指して社会科授業を構成している。その背景には、下線③「地理は横だけでなく縦にも広がってるんだよって話を聞いた時に」、下線④「今はその縦と横のつながりっていうのがすごい面白いなって思って地理をやってる」のように、B教師は高校時代から地理分野の学習に面白さを見いだしていたが、大学時代の授業において地理と歴史のつながりを実感し、高校時代とは異なる地理の面白さを見いだしており、B教師が理想とする社会科授業において必要な要素となっている。B教師の語る「地理的感覚」と同じようにB教師の社会科観の中で重要な要素となっているのが、「見方・考え方」である。下線⑤「一つの物事いろんな視点から見ることで得られる」、下線⑥「どういう風に使っていくのか」、下線⑦「知識と知識の間を埋めるために」のように、様々な視点で物事を捉え、知識として授業で扱う事象間の因果関係を考えていく力を養うことが社会科の役割であり、重要な要素であると考えている。また、下線⑧「1つの物事をちゃんといろんなところから見れる人になってほしい」、下線⑨「その背景を読んでいく」、下線⑩「1点だけでなくほかの方向から見てその相手を認めていく」のように、社会科を通して育てたい子供像については、社会科で育成する多様な見方・考え方を学級生活や他者との関係づくりに応用できる姿を想定している。

以上のように、B教師の社会科観は、学部時代に学んだ「地理的感覚」などの社会科学的な理論を中心として社会認識形成を重視する授業観と、そこから得られる1つの物事を複数の視点から見て、どのように意思決定、行動するかを考える「見方・考え方」を、学級経営や生徒指導、人格形成などに関連付けて子供の能力を育成していくという育てたい子供観によって構成されている。

（3）よりよい生活者の育成を目指す教師－C教師の場合－

C教師は教職歴2年目の教師で1年目は第3学年、2年目は第4学年の特別支援学級を担任してる。大学時代は教育学部に所属し、卒業論文を書くために所属したゼミでは教育心理学を学んでいる。大学時代に社会科について学んだのは必須科目であった授業のみである。

資料3 C教師のインタビューデータ

質：普段どんな社会科の授業してるか印象に残ってる授業とかでも。

C：印象に残ってるのは去年で言うと、昔の道具遊びみたいな、昔の人たちはどういうものをもって生活していたのかとか。例えば洗濯機が昔はどんな道具だったのかみたいなので、Chromebook って今あれでやるんやけど、それで調べ学習して新聞作ったり、子供らがこういう道具がありましたよってクラス全員に一人ずつが紹介していくみたいなのがあって。昔のおもちゃみたいなのも作ったんよね。それで、地域の人が実際に来ておもちゃ作りを指導してくれたんよ、なんかお偉いさんみたいな人が、地域のドンみたいな人が来て、その人をお願いしますって言って、一緒に子供に作り方とか教えてくれるみたいな。①なんか「うわー、地域と交流しているわ」と思った。「これが地域と繋がってる社会だな」って感じ。

質：それはどういうところで感じました？

C：②なんかやっぱ社会って外に、スーパーとかまちたんけんとか外に行くから、地域の人との交流がやっぱあるなあとは思ってたけど、実際に学校に来てもくれるんだ
というか、地域の人との協力が無かったらちょっと難しかったなあというか、子供が興味持ててなかったんじゃないかなっていうのを思ったり

(中略)

質：去年1年目でやってみるまでは社会科って、実習とかで社会やりましたか？

(中略)

C：③社会は勉強するのは好きだったけど教え方が分からなくて、何を教えて、何に気づかせたらいいのかなみたいな。算数とかやったら答えがあるじゃん。理科とかもまあ実験して、実験の結果決まるとるじゃん。社会はなんかね、社会ってむずって思って、何すればいいんって思って、教え方がちょっとイメージできなかったね。

(中略)

質：ここ(授業をするうえで)一番頑張ってるやってますとか、ここが一番大事やなってなんかやってみて思ったな一みたいな。

C：④予想やね、絶対予想。予想なかったらなんか子供が合ってたじゃんとか、それ予想と違ったわみたいな反応がないから。子供自身も、これが有名なんですって終わるよりは、予想がどうだったかを確かめて授業になってるような感じがするかな。って指導の先生っていう人がいるんだけど、初任につく。その人も予想が大事だよって言ってたから、確かになと思ってそれで。

(中略)

質：いろんな教科ある中で社会科の、社会科ってどんな教科って思ってる？

C：⑤そうだな、社会科は学校外での過ごし方というか生活の仕方を勉強できるんじゃないかなと思うかな。自分らの住んでる町のこと知るの大事だし、どこが危険とかそれでわかるだろうし、スーパーはこの辺にいっぱいあるから周りにも人が多いんだとか。自分らの町の様子が分かるような教科かな。それは他の教科にはないんじゃないかなと思う。⑥なんかいろんなジャンルの身近が詰まってるような感じっていう感じがするかな。水道とかごみとかかな。だから生活していくために要するような最低限のことをいっぱい勉強するような教科かな。

質：社会科でなんかどんな力つけてさせようとか、考える？

C：考えてないけど、自分で生活していくような力がついてるんじゃないかなと思う。
ごみの行く末とかさ、それこそスーパーの陳列の工夫とかさ。⑦それを自分で考えれるようになったら生活しやすいんじゃないかな子供が。そういう力をつけさそうとは思ってないけど、ついていってるんじゃないかなと思う、見てて。

質：社会科を通してどんな子供を育てたいですか。

C：どんな子供を育てたい、これは難しいね。世の中のことをある程度知って、ある程度自分で生活できるような子供。普通に常識のあるような子供になったらそれでいいんじゃないかなと。⑧ほかの能力、文章を書くとかさ、計算するとかは別の教科に任せて、普通に生活するような力のついた子供が育っていければいいんじゃないと思うけど。

質：普通に生活できるっていうのは？

C：世の中のこといろいろ知って、交通マナーとかもそうやし、道路標識こんながあるとかも社会やし、買い物の仕方とか、水道・ガスが、水道とか電気とかがどういう仕組みになってるのかとか、知った方が楽に生活できるんじゃないかと思うんじゃないけど。つらいやん何も知らなかったら。

質：そう思うきっかけって何ですか？

C：そう思うきっかけは、俺が社会小学校から好きだったから、これ社会で習ったなとかいうそういうのがずっとあったから小学校から。⑨この道路標識習ったなとか、こういう意味だったなとか。歩いとして、ばって見たら、ふってそういうのが出てきたりして、なんか生活に生きてるなとかいう多分実感しとったからだとは思う。別に自分のクローンを作ろうとしとる訳じゃないけど、こういう自分みたいな、まあある程度知って、ある程度生活できた方が楽しいぜっていう、生きやすいぜっていうのはあるかな。、そういう経験が多分あったんだろうね小学校の時に。

下線①「これが地域と繋がってる社会だな」、下線②「子供が興味持ててなかったんじゃないかな」のように、C 教師は教職に就く以前から社会科授業を行ううえで必要であると漠然と考えていた「地域との交流」を行うことが、子供たちが意欲的に学びに向かっていく様子につながることを実感し、社会科には地域との交流が欠かせないものであると再認識していることが分かる。また、下線③「何を教えて、何に気づかせたらいいんかな」のように社会科の内容については自信をもつことができない部分があるように推察されるが、下線④「予想がどうだったかを確かめて授業になってるような感じがする」のように、社会科授業の指導方法については1年間の実践における子供の反応や先輩教師からのフィードバックを通して自身の社会科授業を確立しようとしている。

また、C 教師は社会科について下線⑤「生活の仕方を勉強できる」、下線⑥「いろんなジャンルの身近が詰まってるような感じ」のように、社会科の内容は子供の日常生活と密接に関連したものであると考えており、下線⑦「自分で考えれるようになったら」や下線⑧「普通に生活するような力のついた子供が育っていければいい」のように、子供たちが社会の中でよりよい生活ができるように日常生活の中での事象や仕組みを自分で考えることができる力を社会科を通

して身につけさせたいと考えている。その背景には下線⑨「生活に生きてるなとかいう、多分実感しとったから」のように自身の経験から、社会科で学んだことが実生活に応用できると感じており、その点で社会科の面白さと教科としての役割を見いだしていることが推察される。

以上のようにC教師の社会科観は、子供の興味・関心を引き出すことや、子供の予想を軸にして社会科授業をつくる授業観と、子供の身近な生活を題材とした学びから、よりよい生活を作っていくことができる人を育てようとしている、育てたい子供観から構成されている。

2 考察

初任期小学校教師がもつ社会科観について語る際、大学時代の卒業論文を書くために所属したゼミでの学びが、初任期の小学校教師が社会科観を形成していくうえで大きな影響を与えていることが明らかになった。それは、初任期小学校教師が社会科観を形成する際に核とする論理となっていた。さらに、初任期小学校教師はそのような社会科観の核となる論理を持ちながらも、再構成していこうとしていた。調査を行った3名の初任期小学校教師は大学時代に所属したゼミでの学びが小学校社会科に直接関係するものか否かに関わらず、自身の社会科観の核となっており、実践を通して理論の応用の難しさを感じたり、子供たちの反応をもとに自身の社会科観の核の部分再構成したりすることによって、成長していた。

また、初任期の小学校教師は社会科授業においては目の前の子供たちの興味・関心や地域、日常生活に直接的につなげて考えることができるような社会科授業が理想であり、地域交流や日常生活の中に存在する事象の認識とその背景を考える力の育成を社会科授業の中心として考えたり、社会科授業で扱う内容や思考の過程においては子供たちにとって身近であることを重視したりしていた。その一方で、社会科を通して育てたい子供像については、将来このようになってほしいという子供たちの未来に対する期待を前提として、どのような人になって欲しいか、どのような社会や人間関係を作ってほしいかという教師がもつ願いと、よりよい未来の社会への志向が社会科の役割に対する考えが核となっていた。

そして、初任期の小学校教師は社会科を通して育成することができる力と、生徒指導や生活指導を通して育成することができる力とを密接に関連付けて考えていることも推察された。初任期小学校教師の中で、社会科を道徳科や日々の生活指導と関連付けて授業を行っているという明確な発言は得られなかったが、社会科を通して育てたい子供像に対する発言の内容は、その教師の生徒指導観や倫理観とも捉えることができる。その背景には、社会科を通して子供たちが様々な人と交流することや、社会科授業を通してよりよい社会を形成していくために不可欠である社会の仕組みを捉える多様な視点と、それらを活用して社会を形成していく力をつけることができることを社会科の役割として認識し、生活と密接に関わる教科であると教師自身が経験をふまえて認識している

ことが理由として推察された。

V おわりに

初任期の小学校教師は大学時代に学んだことを核として自身の社会科観を形成していた。そのうえで、子供の将来像を考えたり、教材研究を行ったりする中で、社会科で子供に何を学ばせるかを考え教科観を充実させたり、社会科の内容の論理を生徒指導や人間形成に置き換えて、資質・能力の育成についての考えを補ったりすることで、社会科観を再形成している姿が明らかになった。初任期の小学校教師は大学時代に学んだ理論や知識、特に卒業論文作成で身に付けた学術の成果を核としながら、日々の授業での子供観察や教材研究、さらに生徒指導の経験など、新しい経験や価値観との出会いを通して、教科観の不足部分を補いながら自身の社会科観を発展させていると言える。

本研究の成果は、以下の通りである。初任期の小学校教師は張（2022）が明らかにした2つの志向性の軸のみによって社会科観を形成しているだけではなく、大学時代の学びも社会科観を形成する際の要因となっており、初任期の小学校教師がもつ社会科観は多様であること、また、初任期小学校教師は社会科観を形成している過程の初期の段階であることから、教師がもつ社会科観には流動性があることを示すことができた。また、本研究からは、初任期の小学校教師がもつ社会科観は、岡島（2018）によって示された教科観の3つの要素のうち、市民像と内容や方法から構成されていることは推察されたが、現在の生徒にこうあって欲しいという生徒像から社会科観を形成している姿は見られなかった。以上のような本研究の成果をふまえると、今回調査対象とした1～3年目までの初任期教師という段階を経た4年目以降の教師は、岡島（2018）が示した3つの要素すべてを含む社会科観を形成するように成長するのではないかという推察もでき、今後、検証が必要である。

（本研究は福田と桑原が共同で企画し、福田が原稿を執筆したうえで、桑原が全体を調整した。）

【参考・引用文献】

- ・スティーブン・J・ソントン著/渡部竜也・山田秀和・田中伸・堀田諭訳『教師のゲートキーピング-主体的な学習者を生む社会科カリキュラムに向けて』春風社、2012年。
- ・岡島春恵「中学校社会科教師の教科観の形成に関する事例研究－教科観形成の多層性と多面性に注目して－」全国社会科教育学会『社会科研究』、第88号、2018年、pp.13-24.
- ・村井大介「地理歴史科教師の歴史教育観の特徴とその形成要因－教師のライフストーリーの聴き取りを通して－」全国社会科教育学会『社会科研究』第81号、2014年、pp.27-38.
- ・渡部竜也・川崎誠司「教師の年齢・経験年数が社会科授業の実態や意識に与える影響について－東京都小学校教員対象アンケート調査（2009年度）の

結果を中心に―」東京学芸大学社会科教育学会、『学藝社会』第29号，2013年，pp.45-63.

- ・張傳博「教師は如何に社会科教材を開発するのか―複線径路等至性アプローチを用いた小学校社会科教師の教材観の分析を通して―」日本公民教育学会、『公民教育研究』，第30号，2022年，pp.33-47.
- ・桜井厚『インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方』せりか書房，2002年.
- ・S・B・メリアム著 / 堀薫夫他訳『質的調査入門―教育における調査法とケース・スタディー』ミネルヴァ書房，2004年.

Study on the Process of Formation of Elementary School Teachers' perspective on Social Studies

-Focusing on rookie teachers-

FUKUTA Yuka *1, KUWABARA Toshinori *2

The purpose of this study is to clarify what rookie elementary school teachers rely on to form their perspectives on social studies and how they try to develop their own perspectives on social studies. I conducted interviews with rookie elementary school teachers hearing their own views on social studies and the process of forming their perspectives on social studies. As a result of the survey, it was revealed that the perspective of social studies held by rookie elementary school teachers is in the process of forming their own view of social studies while filling in the gaps through encountering new experiences and values, such as observing children in daily classes, researching teaching materials, and experiencing student guidance, based on what they learned in the seminar they belonged to in order to write their graduation thesis in college. In addition, with regard to the image of children that they want to nurture through social studies, teachers' aspirations for a better future society are at the core of their thinking about the role of social studies, and they recognize that social studies is a subject that is closely related to student guidance and life guidance.

Keywords: elementary school teacher, social studies perspectives, interview, rookie teacher, gatekeeping role of teacher

*1 Graduate School of Education, Okayama University

*2 Faculty of Education, Okayama University
